

報告4

オルドス地域の長城沿線で発見された前漢時代の大型穀物倉庫跡(国際シンポジウム
中国都城考古学の最前線3
——秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展
——)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 文平, 佐川, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000314

報告4 オルドス地域の長城沿線で発見された前漢時代の大型穀物倉庫跡

張 文平（中国内蒙古博物院・副院長）

1. 沙梁子古城における考古学的発見

沙梁子古城は、内蒙古自治区フフホト市玉泉区小黒河鎮沙梁子村の北西に位置し、ここから約130m南に黄河の支流である大黒河が流れている（図1）。2019～2020年に内蒙古自治区文物考古研究院と中山大学社会学・人類学学院はこの城跡を共同発掘し、大型の版築基壇建物跡一基を検出した。

建物跡は城跡の中部に位置し、その平面は長方形で、軸線がほぼ北西－南西方向で、東西長が約170m、南北幅が約20mある（図2）。版築基壇建物跡のために、城内の高い場所を選択し、四面には厚みのある版築壁がある。基壇上には柱穴と南北方向の溝があり、柱穴は南から北に3列並び、約5m間隔で分布し、中央の1列の柱穴が他よりも大きい。ほとんどの柱穴内には礎石があり、一部は底を版築で固めている。検出した16条の溝状遺構は間隔が約3mあり、多くが南北方向に基壇を貫通し、基壇縁辺に対して垂直である。その形状は整っており、L字形を呈し、その南北両端はやや幅狭く、中間部分は東側に突出してやや幅広い。溝状遺構の東西壁にはそれぞれ6～7本の壁柱を設置し、幅広の中間部分には1列6～7本の南北方向の束柱を設置し、底には礎石がある。一部の壁柱と束柱では炭化柱材が残り、鑑定の結果、皆マツであった。溝状遺構の内壁にはきめ細かい青色の泥と植物混の泥を前後して塗り、壁柱を包み、壁表面には火を受けた痕跡がある。壁柱と束柱は、その上の床板を支えるために設置したはずである。溝状遺構の南北の変曲点は、基本的に基壇の南北2列の柱穴と同一直線上にあたる。断ち割り調査の結果、南北の壁の基底部分は溝状遺構の南北のやや幅狭い部分と重なり、そのうち南壁の基底部分には局部的に石を敷いていた。溝状遺構の幅狭い部分の一部では、壁体倒壊後に残留した日干しレンガを検出することができた。版築基壇の北側の地面では、さらに建物使用段階の末期に開削された1条の排水溝を確認した。

主な出土遺物は、大量の丸瓦（図3）、平瓦（図3）、軒丸瓦（図4）、幾何学文正方形磚などの建築材料である。瓦の大きさは大きく、漢長安城内の宮殿出土の例に匹敵するので、この建物が大型で高さもある規模であったことを明らかに示している。丸瓦の製作技法には明らかに新旧の差があり、鳳凰文軒丸瓦の装飾は特殊である（図4下段、図5）。建物の倒壊した堆積物中からは、底部の対称位置に「萬石」の刻印が2ヶ所押された陶盆（浅鉢）と4点の陶量（土製計量器）の破片が発見された（図6）。

建物基壇上の等間隔に分布し、かつ十分に規則性をもった溝状遺構は、漢長安城桂宮三号建物跡および華陰京師倉などに対比することができるが、また差異もあるにせよ、その機能は通風と防湿である。建物跡に対して断ち割りを行った際に、版築基壇に覆われた1列の穀物貯蔵穴を発見し、その中からは大量のアワやキビの種子が出土した。溝状遺構内の埋土に対して実施した水洗選別作業においても、アワとキビのサンプルを発見した。出土した「萬石」銘陶盆と陶量などの器物を絡めれば、間口が残存16間、奥行が2間の大型穀物倉庫1棟であると目下判断される。その使用面積は1800㎡に近いと見積られる。崩れ落ちた瓦の破片の分布とその埋蔵状態、および軒丸瓦の分布とその点数から見れば、建物の屋根は重層四面坡（入母屋・寄棟）式である。建物の使用期間は前漢中・後期であり、その間修理が数回行われ、最後は大規模な火災で灰燼に帰した。

2. 前漢代のフフホト地区の郡県と長城

前漢代においてフフホト地区には雲中と定襄の二郡が設置され、雲中郡に属する県はフフホト平原地区に分布し、定襄郡に属する県は平原の東部と南部の黄土丘陵地区に分布していた。フフホト平原は北に大青山があり、山麓地帯には前漢初年に戦国時代趙の長城を踏襲した陰山漢長城が東西に横貫し、また山上には紀元前127年に衛青の北伐後に造営が開始された陽山長城があり、雲中郡の二重の長城による防衛線を形成していた。陰山漢長城は雲中郡の主要な防衛線であり、東から西へ向かって東部都尉（陶林県とともに現在のフフホト市新城区タリ古城を共同統治）と中部都尉（北興県とともに現在のフフホト市トムト左

旗ビクチ古城を共同統治)を設置して管理させ、両者の防衛区域の接するところが大青山の蜈蚣壩である。蜈蚣壩は北魏代に白道嶺と称され、山陵上には現在も白道が大青山の南北を縦貫している。この街道はすでに漢代に開通しており、白道嶺の上に造営された要塞は、雲中郡から大青山以北へ通ずる「白道関」の所在地である。

沙梁子古城は、旧白道の南口から南へ約1500m、大黒河南岸の戦国秦漢代の雲中郡古城（現在のフフホト市トクト県古城村古城）から東へ約3000m、前漢定襄郡が統治した成楽県（現在のフフホト市ホリソグ県土城子古城）から北へ約3000m、漢代雲中郡原陽県（現在のフフホト市賽罕区八拜古城）から西へ約1600mのところの位置しており、交通の要衝であった。行政制度上はまさに前漢雲中郡のいずれかの県に相当し、犢和県と推定する説もあるが、まださらなる検証が必要である。

沙梁子古城とその穀物倉庫は、もっとも古くて前漢武帝の時代に造営されたはずである。この時期は、前漢王朝がオルドス地区に多くの郡県を設置し、移民開墾を実施し、農業発展の最盛期をなしていた。発掘された版築基壇跡は体積が大きく、規格（長幅高）も大きいので、国家級の穀物倉庫であり、周辺の郡県由来の食糧の貯蔵に使用され、長城沿線の軍糧として供給されていた可能性がある。紀元前1世紀の中葉には、匈奴の呼韓邪単于が前漢に従属したので、前漢王朝の辺境守備にとって、北疆地区は「数世煙火の警を見ることなく、人民は勢い盛んで、牛馬も広く生育していた。」この大型穀物倉庫は、また前漢後期の平和で繁栄した辺境社会と密接に関係している。

3. まとめ

版築基壇建物跡は、体積が大きく、規格も大きく、国家級の穀物倉庫であった可能性がある。発掘で出土した土器、瓦などの遺物から見るならば、本建物の年代は主として前漢中期のやや早い段階から前漢後期にかけてである。瓦に反映された屋根の修復、および版築基壇外部の地面における幾度もの整地と排水溝の掘削などの状況から見るならば、本建物は何度も修繕され、使用期間は前漢中・後期全体に継続していたはずである。

今回の発掘は、漢代辺境の城に附属する大型穀物倉庫の構造をはじめて明らかにし、辺境の城のこの種の建物の研究に対して重要な実物資料を提供した。これは中国ではじめて北方の長城沿線地区で発見・発掘された版築基壇をもつ穀物倉庫であり、そのことは漢代辺境の城の研究における空白を補填し、漢代の建築技術の研究や、漢代中央政権の北疆に対する経略の研究、そして北方農牧交錯地区の経済形態などの研究にとっても、ともに重要な意義をもっている。

翻訳：佐川 正敏（東北学院大学・教授）



図3 丸瓦（左4点）と平瓦（右1点）



図4 軒丸瓦



図5 鳳凰文軒丸瓦



図6 「萬石」銘陶盆